



子どもんころから、  
海が好き。魚が好き。  
室戸が好き。

この日は、出身校でもある元小学校で「マグロの解体体験会」である。  
80キロ級のメバチマグロを前に、ちびっこたちも興奮気味だ。

「地元の子どもに海の魅力を知ってもらいたい。漁師の醍醐味を  
伝えたい」と、仲間といっしょに始めたボランティアだ。

竹村正人は、室戸岬水産高校を卒業後、外国航路の船員として  
10年働く。高校の機関科で学び、専門はエンジンのエンジニアだ。  
「美しかったのはノルウェーの港。治安が良かったのは台湾。  
ポルトガルでは船室で熟睡中に現金と時計を盗まれた」と、当時の  
思い出話は尽きない。なかでも、妻と知り合った韓国は忘れがたい。  
曾祖父の代から船持ちで、父はキンメ漁師。兄も外国船に乗って  
いた、根っからの海の男の家系である。

室戸は、「人情味がある。魚がうまい。そして星がきれい」。海はひと  
つながり。外国の海を回って、いまは生まれ故郷に落ち着く。

マグロは“はえなわ漁”。近場は千葉や三陸沖から日付変更線のあた  
りまで、年13回ほど航海に出る。2,400本の針を付けた“はえなわ”の  
長さは80キロ。室戸から高知市内まで届いてしまう。潮の流れを  
読みながら、1隻6～9人で、長い時は12時間かけて引いていく。

マグロ漁師・マグロ船主

竹村正人  
(右から3人目)

# 室戸 じと、 進む。